

街を行く

第163回 富士山 Mt.Fuji

世界中の人が楽しめるために

今回は、訪日客を中心とした人気の高まりとともに、「オーバーツーリズム」「入山規制」「弾丸・軽装登山」など、ルールやマナーが問題視されている富士山を取り上げます。

小生は14年前に登りました。五合目から登りはじめ、七合目の山小屋で一夜を過ごし、その翌朝から山頂を目指しました。山小屋での夜、空一面が星で埋め尽くされている光景に、小生は心を奪われたことを思い出します。

ですが多くの登山者は“ご来光”が目当てのようです。明け方に山頂に着くために昼過ぎ出発、そのまま休みなしで登頂を目指す無茶(弾丸登山)も頻繁に取り沙汰されています。一気に行くなんて、よく思うものです。経験者はご存じと思いますが、登山道は傾斜がきつ、ノンストップで登るなんて苦しいだけなのです。

ご来光ばかりに囚われず、夜空のことも思い出し、途中一泊し体を休めてもらいたいところです。満天の星の美しさは誰もが心奪われる魅力があります。日の出であれ夜空であれ、急がず楽しく安全に登れば、いたるところに富士山の魅力を発見できるでしょう。

何はともあれ、日本人も訪日外国人も、とにかく富士山好きなのは、とても有り難いこと。日本は訪日客から収益を稼ぐ観光立国を目指しているわけで、観光資源は大切に守るべき資産。資産価値を維持向上させるには運用ルールの見直しが必要です。

これまで日本のルールは性善説を足場に、良識ある行動に期待し、緩やかで柔軟性がありました。しかしそれはグ



富士山には、外国人のみならずわれわれ日本人の心をも掴んで離さない不思議な魅力がある

ロールバル社会では通用しません。曖昧で分かりにくいだけなのです。多民族社会では性悪説で人を解釈し、多様なリスクを想定した規定を、広範囲、詳細、明確に定める必要があります。不文律や暗黙知の中で暮らしてきた日本人には大変面倒くさい時代といえます。ですが、この先日本は訪日観光客、外国人労働者なくして、経済インフラを機能させ、街を維持できません。人手がなく観光客も来ない都市は路線バスが減り公共サービスが行き届かず、経済が衰退するばかりです。それに比べればオーバーツーリズムは、問題ではあるにせよ“嬉しい悲鳴”と言いかえることができます。日本国中の街を守り活性化するために、好いルールをつくっ

て、ツーリストを上手くどんどん呼び込もうではないですか。

その試金石が富士登山なのです。ご来光や満天の星の感動に触れて誰もが忘れられない楽しい思い出にするためにも、皆さんで考えてください。

南 一弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。